

# 呼称が紡ぐ〈物語〉

—宇治十帖「弁の君」を基軸として—

外山敦子

## 一 『源氏物語』の人物呼称

宇治十帖の始発、橋姫巻に登場する「弁の君」<sup>1)</sup>は、柏木と女三の宮の密通の証を亡き柏木から託されたという設定で薫にかかわり、その後、薫と宇治八の宮の姫君との恋の仲立ちを務めるなど物語展開の重要な局面で活躍し、宇治を舞台とした最後の巻である蜻蛉巻まで登場し続ける人物である。

本稿では、「弁の君」の呼称の変化が、単なる呼称の変化にとどまらず、その人物像の変容と連動し、その変容の過程のなかで物語が生成されていく様相を明らかにする。『源氏物語』読解の一手法として登場人物の呼称に注目する論は、これまでもさまざまな成果を挙げている。森一郎氏は『源氏物語』の人物呼称の重要性を次のように述べる。

源氏物語の人物呼称は外的形式的な呼び名でなく、その場面の

論理、主題性に深く関わって内在的なのである。いわば個別的な文学的時空の形象性を有するのであり、人物造型の核ともいえるべく主題生成を見きわめる上で、重要な徴表となつていよう<sup>2)</sup>に思われるのである。

森氏の説かれる人物呼称とは、「個別的な文学的時空の形象性」、「人物造型の核」の「徴表」であるが、これを呼称と登場人物の役割との関係から見るとは、「その人物が一つの場面でのどのような役割を担っているのかを、呼称が端的に表している」と説明することができる。つまり、『源氏物語』の人物呼称は、人物の役割・場面状況という〈物語内容〉を象徴するものであって、まず登場人物の役割・場面の状況という〈物語内容〉が存在し、それに相応しい呼称Ⅱ〈表現〉は後から設定されるという理解であろう。

こうした人物呼称に、これまでとは違ったアプローチを試みることはできないだろうか。人物呼称という〈表現〉こそが登場人物の

役割や人物像を規定していき、呼称の変化が役割や人物像を変容させてしまう、と考えるのである。本稿は、一例として「弁の君」の呼称変化を取り上げ、呼称という〈表現〉が〈物語内容〉を紡ぎだしていくあり方を提示しようとするものである。

## 二 「弁の君」の呼称変化

弁の君は橋姫巻で、宇治八の宮の留守中偶然八の宮邸に訪れた薫の応対をする、という設定で物語に登場する。

起こしつる老人の出で来たるにぞ譲りたまふ。

〔橋姫・一四三頁〕<sup>3</sup>

この「老人」は、突然薫に出生の詳細について語り出す。しかし物語はこの場面で、薫の出生の詳細を知っているらしい「老人」の呼び名や経歴について、一切なにも語らなかつた。物語がこの「老人」の正体を明かすのは、薫と「老人」との二度目の対面の場面であつた。

姫君の御後見にてさぶらはせたまふ、弁の君とぞいひける。

〔橋姫・一五九頁〕

初登場の際には固有の呼び名が明かさず、その属性による一般呼称である「老人」として物語に登場する弁の君。このような弁の君の登場の仕方や呼称のあり方は、他の人物のそれと比較したとき、特徴的であるといつてよいだろう。次頁の【表】は、「弁の君」に用いられている呼称を登場順に示したものである。

まず、この【表】を概観して明らかになる二点について述べておく。第一に、弁の君の呼称が大きく「老人」、「弁」、「尼」に分類されるということ、第二に、三種類の呼称がそれぞれ比較的集中して用いられていることである。具体的には、「老人」に分類される呼称は、橋姫巻の初登場から総角巻の途中まで、「弁」に分類される呼称は、総角巻の途中から早蕨巻の途中まで、その後は「尼」に分類される呼称が集中してみられる<sup>5</sup>。【表】の~~~~~部分が分岐点。つまり、弁の君の呼称は物語の進行に従って「老人」↓「弁」↓「尼」の順で変化していくのだ。

前述したように、弁の君は物語に初めて登場した際、呼び名が明かさず、「老人」と呼称された。そして、薫との二度目の対面の場面で「弁の君」という呼び名が初めて読者に明かされるのである【表】に□で示した箇所。ところが、「弁の君」という呼び名が明らかになった後も、彼女はなぜかこれまでと同様「老人」と呼称される。結局その後、橋姫巻・椎本巻では一度も「弁の君」は使用されず、この呼び名が再び物語に登場するのは、総角巻の途中からなのであつた。一体、なぜ弁の君ははじめ「老人」と呼称されてきたのか、そして、それがいかなる理由で本来の呼び名である「弁」へと変化したのだろうか。

ちなみに、早蕨巻で弁の君の呼称が「弁」から「尼」へと変化するの、早蕨巻の途中で弁の君が出家剃髪したためで、これは弁の君自身の状況が変化したための呼称変化と受け止めることができる。

【表】「弁の君」の登場順呼称一覧

呼称が紡ぐ（物語）  
（外山 敦子）

巻	老人	弁	尼	巻	老人	弁	尼			
橋 姫	老人143			宿 木	老人454		弁の尼362			
	老人145					弁の尼454				
	老人151					尼君457				
	古人155					尼君462				
	老人159	弁の君159				尼君462				
	古人163					尼君462				
	老人178					尼君488				
	古人183					尼君490				
	古人196					尼君491				
	老人199					尼君492				
椎 本	古人201			東 屋	弁90		尼君493			
	老人212					尼君493				
	古人227					尼君494				
	老人231					尼君494				
	老人247	弁のおもと241				尼君17				
		弁247				弁の尼君85				
		弁251				尼君93				
		弁255				尼君93				
		弁255				尼君94				
	老人258					尼君95				
絵 角		弁263		浮 舟			尼君96			
		弁264				尼君97				
	老人270					尼君97				
	老人274					尼君101				
		弁のおもと307				尼君131				
	老人315					尼君165				
		弁322				尼君166				
	早 蔭		弁358				蜻 蛉			尼君230
			弁360						尼君237	

五五

注 この表は、物語中に登場する弁の君の呼称を地の文に限って抽出し、登場順にすべて並べたものである。用例の右の算用数字は、新編日本古典文学全集『源氏物語』の頁数である。

ところが、「老人」から「弁」への呼称変化は、そうした当人の身分や境遇の変化（外的必然性）によるものとは考えにくい。あくまでも物語内部の何らかの論理によって引き起こされた変化によるものと考えられるのである。

弁の君の呼称変化については、すでに永井和子氏や金子大麓氏<sup>(7)</sup>の貴重な指摘がある。まず、両氏がそれぞれ指摘された内容を整理し、本稿の立場・主張との相違点を挙げることにする。

永井氏は、弁の君に使用される「老人」という呼称に「異質性を持ち、中心的な物語世界の外側に存在する老齢の女房」という意味があることを指摘している。そして「弁の君の役割にとつてはまず当初は『老齢』であることが必要であった」とする。それは、「重大な秘密の伝達者たりうる条件」として「超現実的な異質性を持つ『老者』」であることが必要であったからだと説明している。

また、永井氏は、薫に秘密の伝達を行う弁の君には「老人」という呼称が与えられ、薫の恋の仲介役を担う弁の君には「弁」「尼」と呼称の変化が行われていく、と結論付けているが、この点について、本稿は見解を異にする。【表】を確認すると、たしかに物語は薫に出生の詳細を伝えた弁の君を「老人」と呼称しているが、この呼称は総角巻の途中まで使用されており、このとき、すでに弁の君は、薫と大君の恋の仲介者として活躍しているのである。

次に金子氏の説を挙げる。まず弁の君が「老人」と呼称されることについては「薫にとつて彼女（＝弁の君；引用者注）はまだ本当

には心の許せぬ、しかし疎略には扱いかねる『若い人』であることを示す」とし、「弁」の呼称は、「薫と大君の仲に立つて、二人の仲を成就させようとする役目の人物」であることを示すとしている。「弁」の呼称に関する指摘は、永井氏の指摘と重なるもので、やはり本稿とは見解を異にする。

なお、金子氏は、弁の君の呼称について「構想の展開、心理描写、性格描写等の面において、その場面々々に応じてその呼称を『弁』『弁の尼』『尼君』『老人』『ふる人』等と使い分けて、その効果を高めている」と説明している。金子氏の説かれる呼称変化とは、「状況に応じた呼称の使い分け」という意味であり、呼称と登場人物の役割との関係については、その人物が一つの場面でのどのような役割を担っているのかを呼称が象徴している、と説明することができるだろう。つまり、登場人物の役割・場面の状況という〈物語内容〉が先に存在し、それに相応しい呼称<sup>(8)</sup>（表現）を後から設定するという理解である。こうした呼称のあり方については、永井氏も同様の理解であると思われる。永井氏の「弁の君の役割にとつてはまず当初は『老齢』であることが必要であった」という説明は、物語展開上「老齢」であることが必要であった弁の君の人物設定を、「老人」という呼称が象徴している、という理解と等価であろう。

しかし、これまでの人物呼称に対する理解では、「老人」から「弁」へという呼称の変化は説明できないのではないか。永井論文・金子論文は、「弁」と呼称される弁の君に、「薫と大君の恋を成就さ

せようとする」役割があるとするが、本来「弁」という呼び名にそのような象徴的な意味があるわけではあるまい。「登場人物の役割を呼称が象徴する」という考え方を採用する永井論文・金子論文では、「老人」から「弁」の呼称変化が説明できないのだ。

そこで、本稿では人物呼称に対する発想の転換し、人物呼称という〈表現〉こそが登場人物の役割や人物像を規定していき、呼称の変化が役割や人物像を変容させてしまふと考え、「老人」から「弁」へという弁の君の呼称変化をいま一度考える。呼称が先行することによって弁の人物像が形成されていく様相を、次章で確認することとする。

### 三 呼称が紡ぐ〈物語〉

まず、弁の君が初めて物語に登場した場面をいま一度検討する。

この老人はうち泣きぬ。「さし過ぎたる罪もや、と思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならんついでにうち出できこえさせ、片はしをもほのめかし知ろしめさせんと、年ごろ念誦のついでにもうちませ思うたまへわたる験にや、うれしきをりにはべるを、まだきにおほはれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせずはべりけれ」とうちわななく気色、まことにいみじくもの悲しと思へり。

〔橋姫・一四五頁〕

薫が宇治に通り始めてすでに三年という年月が流れていた。その間、弁の君は「さし過ぎたる罪もや、と思うたまへ忍」んでいたと自ら

呼称が紡ぐ〈物語〉 (外山 敦子)

説明する。見ず知らずの自分が、突然重大な秘密を打ち明けるなどというのは出過ぎた行為であり、それゆえお咎めを受けるのではないかと自制していたというのである。ところが弁の君は、いま薫との対面の機会を得、自ら沈黙を破ることを決意したので。弁の君が長年の沈黙を破り「さし過ぎたる罪」をも恐れぬ行為に及ぶことを決意したのは、次の理由によるものであった。

「かかるついでしもはべらじかし。また、はべりとも、夜の間のほど知らぬ命の頼むべきにもはべらぬを。さらば、ただ、かかる古者世にはべりけりとはかり知ろしめされはべらなん。

〔後略〕

〔橋姫・一四五頁〕

後に判明するが、弁の君はこのとき「六十に少し足らぬほど」〔橋姫・一五九頁〕であり、とうに盛りを過ぎた老人だった。その老人が、「このような機会は二度とない。自分の人生はあと『夜の間のほど知らぬ命』しかないのだから」と、沈黙を破り自ら進んで語る決意を固めたのだ。弁の君の告白は、命の期限を自覚した老人の厳しくも悲しい決断だったのである。

この突然の弁の君の告白に、薫は「あやしく、夢語、巫女やうのもの間はず語りすらんやうにめづらかに思さるれど」〔橋姫・一四七頁〕と動揺する。「問はず語り」とは、話し手の意志だけが、或る目的意識をもつてかたられ、相手側に自分の事情を殆ど一方的に知らせ理解させようとする語りであるが、それは一方で、人に問われる前に自分から語りださうわさを抜けてしまふ危険性と背中合

わせなのであった。

昔の御事は、年ごろかく朝夕に見たてまつり馴れ、心隔つる隈なく思ひきこゆる君たちにも、一言うち出できこゆるついでなく、忍びこめたりけれど、中納言の君は、古人の間はず語り、みな、例のことなれば、おしなべてあはあはしうなどは言ひひろげずとも、いと恥づかしげなめる御心どもには聞きおきたまへらむかし、と推しはからるるが、ねたくもいとほしくもおほゆるにぞ、またもて離れてはやまじと思ひ寄らるるつまにもなりぬべき。

〔権本・二〇一頁〕

弁の君の「問はず語り」は、薫にとつて、長年おほつかなく思つていた出生の詳細を知らせてくれるものであった。しかし一方でその「問はず語り」こそが、弁の君への不信感を増幅させる要因ともなつていくのである。薫の出生の詳細が明らかになるこれらの場面で、弁の君が「老人」「古人」と呼称されるのは、金子論文が説くように弁の君が「薫にとつて心を許すことができぬ老人」だからだと、一応は結論づけることができよう。薫は、こちらが聞きもしないのに勝手に出生の秘密を語るような「問はず語り」をする「古人」を信用しきれないのである。薫が弁の君のことを「問はず語り」をする「古人」と認識しているのは、この場面だけではない。

かやうの古人は、問はず語りによ、あやしきことの例に言ひ出づらんと苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやとまた思ひ乱れたまふ。

〔権本・一六三頁〕

こなたにて、かの問はず語りの古人召し出でて、残り多かる物語などせさせたまふ。

〔権本・一八三頁〕

薫は、弁の君が自分に重大な秘密を「問はず語り」したように、誰彼となく自分の秘密を「あやしきことの例」として語り散らしてしまふのではないかと考えており、秘密の漏洩を危惧する。たしかに、弁の君の語りは「問はず語り」だった。しかし、それは薫一人に対してのものであつて、薫には「かへすがへすも散らさぬよしを誓」つているし、事実、後見を務める宇治の姫君たちにさえ決して口外することはなかった。誰彼となく語り散らしてうわさを拡げてしまふという「問はず語り」ではなかったのだ。実は弁の君という人物は、実現困難と思われた亡き主人である柏木の遺言を遵守し、無事に約束を果たすほどの才覚の持ち主であり、忠実で信頼のおける女房なのである。薫に対しても「秘密を守る」という約束を遂に違えることはなかった。ところが薫は、弁の君を「問はず語りの古人」と呼ぶことによつて、誰彼となくおしゃべりをする信頼のおけない人物、という偽りの弁の君像を作り上げてしまつていゝのだ。つまりここでは、弁の君が信用できない人物だから「問はず語りの古人」という呼称が用いられているのではない。真実の弁の君は信頼のおける人物であるにもかかわらず、薫自身が「問はず語りの古人」と呼ぶことによつて真実の弁の君を見失つてゆき、代わりに偽りの弁の君像を作り上げてしまつていゝのである。まさしく、呼称という「表現」が人物像という「内容」を紡ぎ出しているのである。

そして実は、物語にとつて重要なのは真実の弁の君像ではない。「問はず語りの古人」という呼称によつて作り上げられた偽りの弁の君像こそが、次の物語展開を呼び込む重要な鍵として機能するのである。実際の弁の君は決して秘密を口外しなかつたが、薫は「問はず語りの古人」は宇治の姫君たちには秘密を話してしまふかもしれないと警戒し、「またもて離れてはやまじ」と、いつそのこと姫君たちをわがものにしよとさえ考える。こうして薫は大君接近を正当化・合理化するが、そのつじつま合わせに利用されたのが「問はず語りの古人」という呼称が作り上げた偽りの弁の君像なのである。ここにも、呼称という「表現」こそが次の物語展開という「内容」を紡ぎ出していく様相を見て取ることができよう。

#### 四 変貌させられる弁の君

橋姫・椎本両巻において、弁の君は薫によつて「老人」「古人」と認識され、人間性を誤解されてしまふ。しかし、物語の進行にとつてはその（誤認）こそが重要で、薫が弁の君に疑いの目を向けたところが、大君接近という新たな物語を呼び込む契機として作用しているのであった。そして、薫と大君の恋を語る総角巻へと進行、薫は弁の君に大君との仲介をさせる。しかし、前述したように「薫と大君との恋の仲介者」としての弁の君は引き続き「老人」と呼称される。では、総角巻の途中で弁の君に初めて「弁」の呼称が使用される瞬間、物語はどのような展開をみせているのだろうか。

呼称が紡ぐ（物語）（外山 敦子）

客人は、弁のおもと呼び出でたまひて、こまかに語らひおき、御消息すくすくしく聞こえおきて出でたまひぬ。

〔総角・二四一頁〕

この引用本文は、八の宮の喪中であつた大君のもとに薫がむりやり押し入り、何事もなかつたといえそのまま二人で一夜を過ごした翌朝、薫が弁の君を呼び出す場面である。弁の君の呼称は、この一夜を境に「老人」から「弁」へ変化していることに注目したい。この朝薫が呼び出しのは、「老人」としての弁の君ではなく、本来の呼び名「弁」と呼称された弁の君であつた。そもそも薫は、弁の君を「問はず語りの古人」と呼称することで、大君接近を正当化していた。しかし大君と一夜を共にし、大君を我がものにした今、薫には弁の君を「老人」「古人」と呼称する理由が消滅したのである。

しかしここでは、「弁のおもと」を呼び出した薫自身に、「客人」という呼称が用いられていることも注意すべきである。薫と一夜を共にした（はずの）大君は、父八の宮亡き後、今や八の宮邸の女主人である。薫は八の宮邸の女主人と一夜を共にしたのであって、本来ならばこの一夜を機に身内としての待遇をうけてしかるべきなのだ。その薫を物語は引き続き「客人」と呼称しているのである。しかし、本当に薫は八の宮家の（身内）なのか。薫と大君との一夜には、実事の伴わないという重大な欠陥があつた。薫と大君の夫婦関係は見せかけだけで、その内実は著しく空洞化しているのである。つまり真実の薫は、いまだに八の宮邸の「客人」でしかないのだ。

五九

大君を我がものにしたと思ひ込んで、「弁」を呼び出す薫だが、しかし一方で薫と大君は、いまだに本来の夫婦関係に至つてはいない。薫を「客人」、弁の君を「弁のおもと」と呼称するこの一文は、薫と大君との内実の伴わない不確定で曖昧な関係性を浮き彫りにするとともに、大君を我がものにしたと思ひ込んで安心している薫の認識の甘さをも露わにするのである。

この場面以降、弁の君は薫によつて「弁」と呼ばれるようになるが、この呼称変化と、弁の君の物語における役割とはどのような連動していくのだろうか。この場面の前後、つまり薫と大君とが一夜を共にする直前の場面（A）と、その直後の場面（B）とを挙げ、弁の君の言動を比較することとする。

A けざやかにおとなびてもいかでかはさかしがりたまはむとことわりにて、例の、古人召し出でてぞ語らひたまふ。（中略）

「宮の御事をも、かく聞こゆるに、うしろめたくはあらじとうちとけたまふさまならぬは、内々に、さりとも思ほしむけたる事の上まあらむ。なほ、いかに、いかに」と、うちながめつこのたまへば、例の、わろびたる女ばらなどは、かかることには、憎きさかしらも言ひませて言よがりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど、「もとより、かく人に違ひたまへる御癖どもにはべればにや、いかにもいかに、世の常に、何やかやなど思ひ寄りたまへる御気色になむはべらぬ。（中略）かく山深くたづねきこえ

させたまふめる御心ざしの、年経て見たてまつり馴れたまへるけはひも、疎からず思ひきこえさせたまひ、今は、とごまかうさまに、こまかなる筋聞こえ通ひたまふめるに、かの御方をさやうにおもむけて聞こえたまはばとなむ思すべかめる。宮の御文などはべるめるは、さらにまめまめしき御事ならじとはべるめる」と聞こゆれば、（中略）。老人、はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御ありさまを、いと切に、さもあらせたてまつらばやと思へど、いづ方も恥づかしげなる御ありさまともなれば、思ひのままにはえ聞こえず。

〔総角・二二七―二三二頁〕

### B

暮れゆくに、客人は帰りたまはず。姫宮いとむつかしと思す。

弁参りて、御消息ども聞こえ伝へて、恨みたまふをことわりなるよしをつぶつと聞こゆれば、答へもしたまはず。（中略）  
姫宮思しわづらひて、弁が参れるにのたまふ。（中略）「さのみこそは、さきさきも御気色を見たまふれば、いとよく聞こえさすれど、さはえ思ひあらたむまじき、兵部卿宮の御恨み深さまさるめれば、またそなたさまに、いとよく後見きこえむとなむ聞こえたまふ。それも思ふやうなる御事どもなり。（中略）」など、すべて言多く申しつづければ、いと憎く心づきなしと思して、ひれ臥したまへり。

〔総角・二四六―二五〇頁〕

Aは、弁の君が、薫と大君とを仲介している場面である。ここで仲介者としての弁の君の対応に注目したい。弁の君は心の中で薫と

大君との結婚を「あらまほしかるべき御事」と思っており、二人の結婚が成立することを心から望んでいることが分かる。だが、弁の君はそれを決して口に出したりはしない。あくまでも客人である薫の言い分と主人である大君の言い分を、それぞれ相手に伝えるのみである。

ところが、同じく薫と大君とを仲介する場面Bでは、仲介者としての弁の君の態度が大きく異なっている。例えば、A・Bそれぞれ別の□部分、A「あらまほしかるべき御事ども」、B「思うやうなる御事ども」の指し示す内容はいずれも「自分(弁の君)が願っている事Ⅱ薫と大君の結婚」であり、A・Bともに、薫と大君が結ばれて欲しいという弁の君の気持ちに変化はみられない。しかし、Aの弁の君が、それぞれ相手の言い分を伝えるのみで、自分の願望は、「思ひのままにはえ聞こえず」だったのに対して、Bの弁の君は「二人の結婚は願ってもないことだ」と大君にはつきり意見しており、呼称変化を境に、弁の君の言動は大きく変化しているのである。これはBの傍線「恨みたまふをことわりなるよしをつぶつぶと聞こゆ」という部分も同様である。弁の君は大君に、薫が大君のつれない態度を「恨みたまふ」ことを伝えただけでなく、薫が「恨みたまふ」ことは、自分(弁の君)が考えても「ことわり」なのだ、「つぶつぶと」大君を諫めている。「老人」から「弁」への呼称変化は、単なる呼称の変化にとどまるものではなく、弁の君の人物像の変化とも連動していくのである。

そして、弁の君の変貌は、さらに物語を新たな展開へと導くことになる。薫に全面的に協力する「弁」に不信感を持つて反発するのは、以前のように薫ではなく、今度は大君なのであった。大君は突然自分の願望を主張するようになった「弁」に「答へもしたまはず」、「いと憎く心づきなしと思して、ひれ臥したまへり」と徹底的に反発し、以後大君は一人殻に閉じこもってひたすら死へと向かっているのである。

本稿では、『源氏物語』の人物呼称が一々の場面の論理や人物像を象徴するものとしてあるのではなく、人物呼称という〈表現〉こそが登場人物の役割や人物像Ⅱ〈物語内容〉を決定していくあり方について考察を試みた。今回は一例として「弁の君」の呼称を取り上げたが、呼称という〈表現〉が物語を導いていくという考え方は、「弁の君」のような端役にのみ適用されるのではなく、主要人物についても同様であると考える。物語は〈ことば〉によって紡ぎ出されるものだ。物語の登場人物は、呼称という〈ことば〉がその存在を規定していくのである。

注

(1) 本稿で取り上げる「弁の君」は、早蕨巻で出家剃髪することから、一般に「弁の尼」と通称される。しかし、『源氏物語』中「弁の尼」という呼称は二例しか存在せず〔表〕参照)、「弁の尼」は物語内における最も一般的な呼称とは言い難い。本稿は呼称を考察の対象としている

ため、あえて現在の通称「弁の尼」を使用することを避け、物語が初めて「弁の君」の経歴を語る場面、

姫君の御後見にてさぶらはせたまふ、弁の君とぞいひける。

〔橋姫・一五九頁〕

で紹介された呼び名を通称として採用することにした。

- (2) 玉上琢彌「源氏物語作中人物呼び名の論」〔源氏物語評釈別巻—源氏物語研究〕、角川書店、一九六六年三月)、田中恭子「源氏物語の人物造型における呼称の意義」(「関根慶子教授退官記念 寝覚物語対校・平安文学論集」、風間書房、一九七五年九月)、清水婦久子「源氏物語の人物呼称—「うへ」と語りの問題—」〔論集中古文学5 源氏物語の人物と構造〕、笠間書院、一九八二年五月) ↓ 改題「人間呼称「上」と語り」〔源氏物語の風景と和歌〕、和泉書院、一九九七年九月)、吉岡曠「人物呼称—(源氏物語 表現・発想事典)」、〔別冊國文學 源氏物語事典〕、學燈社、一九八九年五月)、吉岡曠「源氏物語における人物呼称と語り手」〔國語と國文學〕第六八卷第六号、一九九一年六月) ↓ (「物語の語り手—内発的文学史の試み—」、笠間書院、一九九六年六月)、森一郎「源氏物語の人物造型と人物呼称の連関」〔源氏物語の探究 一六〕、風間書房、一九九一年二月) ↓ (「源氏物語の主題と表現世界—人物造型と表現方法—」、勉誠社、一九九四年七月)、木村佳織「紫上の妻としての地位—呼称と寝殿居住の問題をめぐって—」〔中古文学〕第五二号、一九九三年一月) など。
- (3) 森一郎「源氏物語の人物造型と人物呼称の連関」(「源氏物語の探究 一六」、風間書房、一九九一年二月) ↓ (「源氏物語の主題と表現世界—人物造型と表現方法—」、勉誠社、一九九四年七月)。なお、引用

文の傍線は引用者に拠る。

- (4) 引用は、すべて新編日本古典文学全集「源氏物語」(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、下に巻名と頁数を記した。

- (5) 総角巻の途中からは「弁」の呼称が圧倒的に多くなるとしたが、しかし「表」で明らかかなように「老人」という呼称が皆無になるわけではない。しかし注目すべきは、弁に使用される呼称を概観したときに見出すことができる大きな変化(流れ)であり、本稿ではその変化がいかなる現象を引き起こし、どのように物語の展開を誘引するかという点について考察を試みた。橋姫・椎本両巻においては、一例を除き用例の見られなかった「弁」という呼称が、総角巻の途中から増えていることには間違いなく、今回はその現象に重点をおいた。

- (6) 「源氏物語のおいびと」と「老人」——ことばの意味するもの」〔源氏物語の探究 一五〕、風間書房、一九九〇年一〇月) ↓ 改題「源氏物語の「おいびと(老人)」——ことばの意味するもの—」〔源氏物語と老い〕、笠間書院、一九九五年五月)。

- (7) 「弁の君」呼称考—宇治十帖に於けるその呼称の変化について—

〔国士館短期大学紀要〕第一二号、一九八七年三月)

- (8) 伊東肇「トハズガタリ—「カタリ」の一形態(源氏物語における意義)」〔芸文研究〕第二八号、一九七〇年二月)